

# 11月のくもの子の会だより

〈11.29.11.10〉

秋が深まり寒さもやってきていますが、11月にはいつも目ざしが強く気温が上がったり、朝晩は、急に冷たいです。気温差が極端で体に不向きな気候です。この短かく感じる秋の季節を、十分満喫してくださいね。秋の味覚も、いろいろたくさんありますから、楽しんで、元気に過ごしてください。

くもの子の会7月号で人格の4つの柱について書いたのの続きです。

## 〈第2の柱 — 意欲(自発性)〉

— 子どもにまかせる育て方が意欲を伸ばす —

第2の柱は意欲(自発性)です。

自発性というのは、自分で考え、自分で行動する力です。ただし、この「自発性の発達」は、その下の層の「思いやり」に支えられて意義のあるものになるのです。「思いやり」に支えられていないと、利己主義になって、周囲のものに迷惑を及ぼすことがあるからです。

子どもの自発性は、親にまかされることにより発達します。ですから、お母さん、お父さんとしては、口を出したり、手を貸したりしないで、子どもの様子を見守っている姿勢が大切です。

逆に言えば、親から過剰保護、干渉を受けている子どもは自発性の発達が遅れています。

自発性の発達が遅れている「おとなしい、よい子」は、



(人格構造)

思春期になり、自己決定を迫られるようになる、それができなくて様々な問題を起こすことが多いのです。

この「自発性の発達」は意欲と結びついていて、意欲とは、いきいきと生きる力であり、それは「自発性の発達」により育てられます。

さらに、「自発性の発達」を基盤として、創造性が発達します。創造性とは新しいものを生み出す力で、この力が発揮されるには、これまでの枠組みをはずしたり、それに挑戦する努力が必要になります。社会的には「型破り」と言われることになることもあります。

したがって、現状を競争しようとする意欲や「右にならぬ」に抵抗する心も必要になります。その意味で、封建時代が長く続き、今日でもその時代の仕組みや教育がたまたまに残っているわが国は、非常に育ちにくい人格の柱です。

## 〈第3の柱 — 適応能力〉

— 子どもに失敗の体験を —

第3の人格の柱は「適応能力」です。子どもには、これを取り巻く家庭やその(ほかの)集団があり、その集団には約束やきまりがありますから、それを守ろうとする気持ちは養われなくてはなりません。それは、自分の考えでいたっていいから、それを抑える経験が必要ですが、それは大人から言われたから、というのではなく、周囲の人々に



文字「思いやり」から自分の欲求を抑えて我慢する事が必要になります。(中略)

適応能力を発達させるためには、何れも子どもにいろいろな体験をさせる事が必要です。

なかでも失敗の体験が非常に大きな意味を持ちます。

未経験な子どもが何か新しいことに挑戦する場合、うまくいかない方がむしろいいです。しかし、そのつらさ(に耐えるという体験)をさせる事が必要なのです。その点で、子どもに失敗をさせないようにと、先回りして手を貸してしまうお母さんは、この適応の能力を育てる事ができません。

また、生活習慣の自立も適応の能力の一つになります。

これも自覚性の発達に支えられなければならないと、

と言いますのは、たとえ親に言われなくても、朝、顔を洗い、歯を磨いているという子どもは、親がいないところでは、顔を洗わず、歯も磨かない、ということも、実は数多く見られた

からです。とにかく、いちいち指示していたのでは、子どもの生活習慣は自立していきません、ということも覚えておきましょう。

— 欲望をかまえる能力を育てるのは家庭教育の責任です—

社会的な適応能力の発達という点で、忘れてはならないのが、物質的・金銭的欲求の統制です。

子どもがお菓子、おもちゃなどの物やお金などをほしがった時

に、お母さん・お父さんはどのように対応したらいいのでしょうか。

無制限に買い与えたのでは、子どもに欲望を統制する能力は育ちません。(中略)

### <第4の柱—知性>

第4の人格の柱は知性です。



この知性においては、大人側から子どもに教える必要が多ければ、それを暗記することで子どもの知識は豊富になるでしょうが、自覚性に支えられていない場合は、自分で学ぶ力が養われていないために、中学から高校、大学へと進学する過程で、挫折する事になりやすいです。

また、知識ばかり豊富な頭ごつちの子どもに、情操の発達に伴って、いけない場合には、知能犯などと言われているのに、親や周囲の人々に不愉快な思いや悲しい思いをさせたり、悪知恵を働かせて大きな迷惑をかける事になります。

知的能力は、「意欲」と「思いやり」という人格の基盤に支えられて、「知性」として輝き出ると言えます。「知性」とは、他人のために自分の知能を使う力である—と私は定義しています。

「子どもにとって、遊びは生活であり、学習である」と言われています。真の知的能力は遊びの中で、自主的に様々な体験をさせる事の中から育つのです。子どもにとって遊びは絶対に必要なものなのです。

その点で、様々な問題を起す子ども達の育て方をくわしく開いてみると、親達の関心が勉強に集中して、家庭でも勉強中心に育てられているケースが多々あります。

(後略) <スチンツァーの心が育つ>

平井信義 著

